



それっ
その顔
まじか
キレ

おのれ



したが
相当の

トン

生みの苦しみ
があつたと
見えるぞ

まさに
体験こそ
教師なりつて
感じですね



これは
長居を
してしまつた
さで帰ると
しめよう

父様
京都見物
なしに
しましうか
まじか

おーっ
順さん
鏡かりとり
ます

はははははは

お茶を
のこす

安永四（一七七五）年、兄の塾に桃西河さん、辻子礼さんが入塾した。友人も増え、中には地理学者の長久保赤水様もいらした。冬には河村秀願様と文会書庫記を作っている。



そっせ
そっせ

ま

新婚宅に
長居は無粋
や

うはははは

つれて来るんじか
かなかたかな



翌五年、藩命で兄は江戸づめにもどった。お順様はお弟子さんたちと京都に残っていた。阿波藩邸で孝靖様に講義をする以外は兄はほとんど昌平校に顔を出し芝山先生や友人達と何度も詩会をひらいていた。



しかし先生が

讃岐に帰ってしまわれると私達は学問の方が少し心細くなります

安心しなさい



あのふたりが居るよ

勉強でわからない事があれば全部書きとめておいて後で彼等にきくといい

はいっ
芝山先生



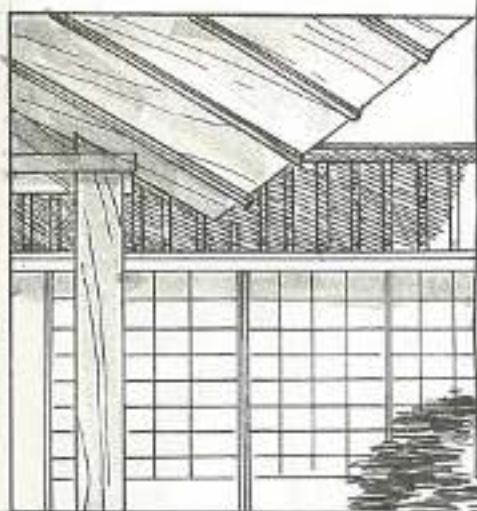
彦さん得意の琴で一曲やつくわね

得意じゃ

ないですよっ

もっくろくろく

讃岐に帰ってこられた芝山先生はお城の南にできる藩校「講道館」の初代総裁になれる。
六代藩主頼真様のもと讃岐はこのところ、おだやかだった。



八年には久保さんが一橋家の儒官になって、兄も大喜びしていた。でも嬉しいことばかりはつづかず



それからわずか三年のうち不幸がつづいた。

野口のおばあさまが亡くなり、阿波のお殿様が亡くなり、やがて父が病死した。



そして江戸で床についていた兄のもとへ芝山先生の死の知らせが届いた。天明二（一七八二）年四月三日のことだ。



兄は三年間、讃岐と江戸
京都の間を何度も往復し
た。兄はその足をどんな
想いで運んだのだろう。

父を亡くした頃から胸を
病みはじめ、芝山先生を
送るために帰ってきたと
きの兄は、見ているのも
つらいほどにうちひしが
れていた。

さんざん
三白社があ

詩人ばかりの
同人会を

つくろうと

おばあさまや父の身体
にとりついて号泣する
兄に、私はかける言葉
を失い、泣くことすら
忘れていた。

ゴホ

ずいぶん塾生
さんが増えてにぎやか
になったね

まあな

ふふふ

お前の子供たち
や、芝山先生の息子さん
たちもひきとつたし…
にぎやかにもなるさ

兄は京都堀川にもどっていた。天明四年に私はその兄をたずねた。私の三男允中も兄のもとにいた。



とーさん
だよー！

はやい
允中
おん様か来て
いらしたのね

あら
あら

お安にも手伝ってもらっているとかと子供達をかまっていられない。でもこころいつもお順様が可愛がってくれるし、兄から学問を吸収できる。子供のない兄夫婦にとって今は何よりも血のつながりは



あなた

大丈夫かつ
兄さん


大げさだよ
お前たちは
ははは...



兄さん



なぐさめに
なるだろう



ここ何年かききんがつづいている。江戸・大阪では飢えと、田沼様のやり方にたまりかねた町や村の人々が米屋や質屋などの大だなをおそったりしていた。

皆が苦しんでいる中で、お役人や大商人達は涼しい顔をしている。——お金だ。お金をつんで商人はお役人にとり入り、お役人はご老中にとり入る。——自分の欲とお金だけにしか興味のない連中なのだ。

おいつまた打ちこわしや、むこうすじの三国屋

このご時世他に手がないかもね

俺らも欧られるかと思つた

他に手がなからついても非常識とは思わんかつ盗みに暴力だぞ



天明四（一七八四）年三月、江戸城で新番頭・佐野様が田沼意知様にきりつけるという事件がおこった。



十月十九日

兄の親友、久保
仲通さんが亡くなった

一橋の儒官になつて
まだ六年にもならない
のに……まだ……

……順

あなた

筆を……
持ちたくない

そうか
まだ京都へ

さみしくなるなあ
今度会えるのは
いつになるだろうなあ

芝山塾代表だ
お互いがんばろう
彦さん

大切な人の

……
墓碑文を
書くための
筆は……

もう……
持ちたくない

この頃には私の身体
にも病が入りこみ
——どうも
勝てそうになかった

天明六（一七八六）年一月四日、父の命日に、私の呼吸は止まった。四月には芝山先生の息子さん厚甫君、六月には允中が兄のもとを去る——死というかたちで



お前まで
行ってしまうのか
小輔！

どうしたんやろ
傷が痛むよ

聞こえるんやろ
…小輔

—そう、私は兄のそばに
来た。これまでにないほど
近く、兄の魂の横にいる。
—今の私の声ならばいつ、
どんな時でも兄の耳にはき
こえるはずだ。

ギ



天明七（一七八七）年秋・阿波のお殿様のところへ、兄を幕府にあげるように命が下った。辞退を申し上げたが聞きとどけられず、兄は幕府儒官になる決心をする。



このころ、地方にいる儒官が、幕府の儒官として召し出されることは珍らしいこととて、大変な名譽なのだ。兄が辞退したのは兄の謙虚な気持ちからだったにちがいないが、私には、兄の前に愛しい人達との死別の大きな傷がたちふさがっているように見えた。――だが十二月、兄は具合の良くない身体をおこした。



久保さん
生きていれば
あなたが



あなたこそ
幕府儒官に
ふさわしい方だったのに

